

## 「3.11」から10年

### 「野球の底力を・・・」重荷だった言葉 そして今

東日本大震災から今日で10年が経過しました。先月中旬にも大きな地震があり、そしてここ数日も東北で、そして世界で地震が続いています。思い起こしてみると、東日本大震災の約3週間前ニュージーランドのクライストチャーチで地震が発生。大きな被害があり、そして現地には日本人にも犠牲者が出ました。その後、3月11日の2日前、東北地方の三陸沖でも大きな地震がありました。宮城県の公立高等学校の入試が行われている日でした。

私は、市内中学校の教頭として、学校にいましたが、3年生の生徒が沿岸部の学校を受験していました。教員も同行していたため、すぐに連絡を取ってみると「大丈夫です。入試は予定通り続行されるようです。」と通話も出来て、安心したことを思い出します。ところが、その2日後の3月11日、未曾有の大地震が東北地方を襲いました。

東北のプロ野球チーム楽天球団は、兵庫県明石市で、オープン戦のさなかでした。ほとんどの選手の家族は、仙台で暮らしていたそうです。家族を心配し、地元を心配しつつも、交通網もライフラインも麻痺していた中でチームは、3週間後の4月2日、仙台市にずっと戻れないまま札幌ドームでの慈善試合に臨みます。その試合前、当時楽天の中心的存在だった嶋基宏捕手は、あの有名なスピーチをします。「見せましょう、野球の底力を。見せましょう、野球選手の底力を。見せましょう、野球ファンの底力を。ともに頑張り、東北。支え合おう、日本」私もこのスピーチを聞き、涙しました。多くの方々に前を向くエネルギーを与えた素晴らしいスピーチでした。このスピーチは、発信した嶋選手本人も想像できないほどの影響力を持ちます。

「あの言葉に励まされた、救われた、と言ってもらえたのはうれしかった。その半面、僕にとってすごいプレッシャーになり、重荷になった」そうです。震災の前年は好成績だった嶋選手は、震災の年は振るいませんでした。普通にプレーしているつもりなのに、周囲からは「暗い」「はつらつとしていない」と言われ「1日が長く感じ、同じ試合数なのに1年がすごく長く感じた。」

その年は5位。翌年12年は4位。「プレーではなく、スピーチで脚光を浴びていることが悔しかった。野球で成績を残せなければ、あの言葉は、野球人の『単なるおごり』で終わってしまう。」そんな嶋選手の支えになったのは、ファンの言葉だったそうです。「連敗しても、とにかく最後まで全力でプレーするところを見たい。」と言われて、「とても楽になった。そしてその後、優勝したことによってかなり肩の荷が下りました。」

しかし、震災から5年が経過した時、嶋選手は、「あのスピーチを後悔している」自分に気がつきます。被災地の本当のつらさを知らないまま、あのスピーチをしてしまった。そんな思いがあったようです。被災地に行っていない自分が、被災者のことをきちんと考えられていたのか。申し訳なくも思ったそうです。優勝した年のことは私達も鮮明に覚えています。「球場や街の雰囲気、仙台だけじゃなく、東北が一つになっていくのを肌で感じた。その感覚が忘れられないから頑張れる。」5年経過して感じたことだったそうです。そしてその後、月日は流れ、10年が経過しました。「今は、野球が前向きに生きていくための力になればいい。野球の持つ力を改めて感じている」という気持ちだそうです。そんな嶋選手に、この東北に戻ってきてほしいと思うのは、多くの方々の望みだと思います。「3.11」時の経過が人の心の区切りになることはないのだと思います。